

17.1.18

障害者の大量殺傷事件の起きた相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」の再建問題で、県が示した全面建て替えの方針に障害者団体や有識者から「同じ場所に再び大規模施設を造るのは時代錯誤」などと異議が相次いでいることに、黒岩祐治知事が「非常に心外」と不快感を示した発言が波紋を広げている。黒岩知事は入所者の意思確認は困難で施設職員や家族会の意向を踏まえて判断したと強調するが、大半の入所者の意向は分からないまま。障害者の権利を考慮の上で重要な「私たちのことを、私たち抜きに決めないで」という基本理念を欠いた結果生じた「ずれ」が浮き彫りになった格好だ。

(成田 洋樹)

黒岩知事「心外」発言の波紋 ①

黒岩知事が不快感を示したのは、障害者団体や有識者から意見を聞いた公聴会翌日の11日。公聴会では入所者の意向を丁寧に確認するよう促す意見が相次ぎ、県の方針に異議が噴出した。これに対して黒岩知事は「建て替えの判断そのものが間違っているのではないかとされていることは、非常に心外」と発言。判断の根拠は、やまゆり園の職員や家族会の意向にあると強調し、「事件直後に入所者と接したが、意思確認は非常に難しいと痛感した。地道にやっていたいかなければいけないと思うが、本人の意思が確認できない場合は家族の意見を聞くのが次善の策」と判断の妥当性を主張した。

県は当初から入所者本人の意向確認は困難としてきたが、年末年始にかけて簡易的な意向確認を実施。小島督寿福祉部長は公聴会終了後、報道陣に「回答なし」「決められない」が合わせて6割に達したとの結果を明らかにし、黒岩知事は現時点で意向の再確認は行う考えはないと明言した。

時代の正体

障害者殺傷事件考

当事者尊重と「ずれ」

黒岩知事一問一答

切実な思い受け「決断」

黒岩知事の11日の報道陣との一問一答は以下の通り。
—公聴会で障害者団体から建て替えにかなりの異論が出たが。

「建て替えは非常に重い決断だと思っている。建て替えをしなくて済むなら、われわれとしては楽。費用負担も少なく済むから。だが、あえて建て替えを、それも初期の段階で私自ら発言した。現場に真っ先に飛んで行き、血だらけの悲惨な現場が残る中で、必死にケアを続けている職員の姿に心を打たれた。今は頑張っているが、このまま続けるのは無理、きれいに掃除しても続ける自信はないという生の声を聞いた。家族会にも話を聞き、何とかこの場所で建て替えてもらえないかと示された。切実な思いを受け止め、決断した」

「大規模な改修か、建て替えしかないだろうとその場で話した。それがこれだけ時間がたった今、建て替えの判断そのものが間違っているのではないかとされていることは非常に心外だ。地域に開かれた施設に移行しているという国の大きな流れは十分承知している。しかし、今回の緊急事態は早く修復しないといけない。現場の思いを受け止めて判断した。できる限り地域に開かれた、新しい形の施設の在り方を模索しながら造っていきこうと提案した中で、建て替えが間違っているかのように言われたことは非常に心外だ」

—公聴会を受けて基本構想はどうアレンジしていくのか。

「出た意見を整理し、どう具体的に反映していくかは、重大に受け止め、前向きな形を出していきたい。基本は安全安心な施設で、地域に開かれた形であること。うまくやらないと逆になってしまう。高い塀を造って隔離するのは、安全安心を守りやすいかもしれないが、それは違うだろう。事件が起きた後だが、塀をなくし開かれた形が見えるようにしたい。さらに充実した、皆さんの要望に合う案を練り上げていきたい」

—入所者から意向を聞く努力をすべきとの意見があった。

「事件直後に現場で入所者と接することができた。現実を見た時、意思確認の作業は非常に難しいと痛感せざるを得なかった。地道にやっていたいかなければいけないと思うが、基本的には本人に直接聞けなかった場合、本人の意向が一番受けている家族らの意見を聞くのが次善の策。家族の皆さんがこの場で早く再開してほしい、全面建て替えの上で再開してほしいということだったから、それが恐らく入所者の意見になるだろうと受け止めている」

—あらためて意向確認することは。

「それはなかなか難しいと思う」
—公聴会ではグループホームを体験した後に意向を確認している先進例も紹介された。そうしたやり方も考えられないか。

「現時点では考えていない。非常に難しい作業だ。家族が表明している意見は入所者の思いを受け止めて発言していると解釈している。まさか入所者の皆さんは違うことを考えていて、家族は全く違うことを言っているとは思いたくない」

こうした姿勢に疑問を呈するのは、公聴会で意見陳述を行ったNPO法人県障害者自立生活支援センター理事長で脳性まひの鈴木治郎さん(61)＝海老名市在住。12日、神奈川新聞社の取材に「何よりも入所者本人の意向を確認することが大切。重度障害者の意向確認はできないとはなから思い込んでいないだろうか」と指摘。大規模施設を再建する方針に「障害者や家族を支える仕組みを地域でつくり、健常者と日常的に接する環境を整えることこそ、県が憲章でうたっている共生社会につながるのではないか」と話した。



の意向がイコールとは限らない」との意見が出され、鈴木さんは発言者から出された疑問点について県側の考えを示す機会を設けるよう要求。県は「基本構想についてのヒアリングは今回で終了」と答えるにとどまり、傍聴者が「巨大プロジェクトの公聴会が1回限りというのはおかしい」と批判する一幕もあった。県は2月までに全面建て替えを柱とする基本構想を策定するとしている。

10日の公聴会で発言する鈴木治郎さん(左)＝横浜市神奈川区のかながわ県民センター

県方針の白紙撤回を

NPO法人県障害者自立生活支援センター理事長 鈴木治郎さん

県の議論は拙速。現在地での全面建て替え方針を白紙撤回してほしい。あの場所にまた施設を造るのか、分散させるのか。いろいろな意見があると思うが、入所者にとって最も望ましい暮らしの在り方が何なのか、もっと議論することが必要だ。指定管理者である「かながわ共同会」や家族会の意向だけでなく、障害者団体などの意見も踏まえ、神奈川らしい福祉の在り方を考えていくべきだ。多額の公費が使われるのだから。

何より入所者本人の意向を確認することが大切だ。殺傷事件があった場所に住みたい人がいるだろうか。重度の知的障害者は「事件があった場所」と認識していないと思っていないか。重度障害者の意向確認はできないとはなから思い込んでいないだろうか。自分から望んで施設に入った人はいない。地域で暮らしてみたいという人がいても今のままでは選択肢がない。

事件に屈しないために同じ場所で建て替えるとは県は言っているが、その考え方は誤っている。地域のグループホームやアパートなどで暮らせるよう障害者や家族を支える仕組みを地域でつくり、健常者と接する環境を整える。それがこそ事件に屈しないということだ。県が憲章でうたっている共生社会につながるのではないか。

書籍化のお知らせ

「時代の正体」シリーズの書籍化第3弾「ヘイトデモをとめた街—川崎・桜本の人びと」が刊行されました。ヘイトデモに対する闘いからヘイトスピーチ解消法成立

への歩みをたどりながら、「共生のまち」に暮らす住民の思いをつづり、差別の実相を問う。現代思潮新社から1600円(税別)で全国の書店で販売中。

痛む 関節

コンドロイチン 関節内の軟骨成分の合成を促進します。

コンドロ

ボウイ配